「…っんぅ……♡」

全裸の少年は、喉奥から込み上げる声を噛みころした。

少年は体格のよい中年男の膝上に座らされ、両乳首を男の手に捏(こ)ねまわされている。

暗闇の中。少年のなめらかな裸体に、前方からのみ強い光があたり、痩せたあばらの影をあやしげに浮かび上がらせた。光のみなもとは劇場前方に設(しつら)えられた巨大なスクリーン。

そこには淫猥な、男性同士の絡みが映し出されていた。

「んぅ……っ♡♡ん…っ、」

押しころしてもなお漏れ出す自分の声が、次第に甘さを含んでくる。

両乳首からの刺激に耐えかね仰(の)け反(ぞ)るように晒したうなじに、男の熱い息がかかった。

「ふふ……。いい映画を見ながらの自慰って、やっぱり最高だなぁ」

男が笑うたび、煙草のにおいのする息が少年の頬をかすめる――。

昭和××年五月。東京都某所。

都心から随分と離れた場所に、その映画館はあった。

飲食店のひしめき合う通りの一角にある、モルタルの木造二階建て。

明治に芝居小屋として名を馳(は)せたその劇場は、大正に入って巨大なスクリーンを導入し、活動写真館として営業を開始した。「活動写真館」から「映画館」に呼び名が変わり、昭和に入っても長らく周辺住民に親しまれてきた、歴史ある劇場だ。日中の観客数はいまだ衰えず、満席になることもざらにある。

そんな由緒ある映画館が隠れてこんなことをやっているなんて、一体誰が想像するだろうか――？

「ぁあ……っ♡」

くりくりと乳首を回し捏ねられた後、片方の頂きをぐりっと圧(お)し潰され声が出てしまう。

「こらこら。性玩具(おもちゃ)は声出しちゃだめでしょ」

明らかにこちらの反応を愉しんでいる口調で、耳元の声が囁く。男の声は、彼の筋肉質な体つきをそのまま表現したような重低音だ。

「ん～～。世の中にこんなにいい性玩具(おもちゃ)あるなんてなぁ。オジサンが若い頃なん

て、コンニャクだったよ、コンニャク」

聞く者の鼓膜を溶かすような低い声で、なんととんでもないことを言うのだろう、この人は――。少年には声を出すなと言ったのに、男は楽しげに話しかけてくる。

「館主(かんしゅ)はこんないい性玩具(おもちゃ)毎日使いホーダイなのか。うらやましいね。ま、私もお金さえ出せば週一で使い放題だし文句ないけどね」

「んぅ……ッ！♡♡」

今度は反対側の乳首を圧(お)し潰され、躰(からだ)が小さく跳ね上がる。
と同時に――後孔に咥え込まされた図太いものを、内壁がきゅっと締め付けてしまう。

「おぉ…、締まるねぇ～～。なるほどなるほど。乳首を弄るとナカが締まるんだねぇ」

「！んぅ♡♡、ぅ…ッ♡♡♡」

男は少年の乳首を強めに弄りはじめる。

深夜十二時。映画上映開始と同時に、少年の孔にこの男のものは突き入れられた。たいして慣らされもしていない孔に挿入(いれ)られたにもかかわらず、痛みはまったく感じない。

男は膝上の少年を貫いたまま、映画を鑑賞し続けている。

「んぅ…ッ♡ん……っぅ…っ♡」

乳首を弄(いじ)る指には緩急がつきはじめていた。

「ほぉ〜ら、次は右をつまんであげようねぇ？」

「！んあッ♡♡」

「あ、ごめんごめん。こっちは左だったか〜」

もし少年が全裸でなく男がこんな行為さえしていなければ、二人はただの父子(おやこ)に見えたかもしれない。膝の上に子どもを乗せ、一緒に映画を楽しんでいる——。けれど現実は、そんなほのぼのとした光景とはかけ離れている。

そもそも上映されているのは男性同士の睦(むつ)み合いばかりが目立つピンク映画で、深夜のこんな上映回に少年がいること自体、表向きにはできない理由があった。

この深夜の上映会は、最近この映画館の館主がはじめた裏事業だ。

館主の男があやしげなルートで見繕った、あやしげな客だけが来る。もちろんこんな時間に上映がなされていること自体、一般客には知らされていない。

客人たちは夜の闇にまぎれ、皆(みな)映画館の裏口から入ってくる。そして入場前に、通常の鑑賞時の五十倍近い金額を係員に渡した。さして気負う様子もなく、まるで煙草でも買うように彼らはその金を支払う。

きっと並でない金持ちなのだろう。

「…っんぅ……♡♡っぁ…っ、♡いや…っぁあ…、！」

しばらく弱い力で擦られていた両胸を、再度唐突に圧(お)し潰された。

圧(お)された両側から小さな稲妻のような刺激が駆けおり、少年の体内をざわめかせる。連動して奥深くまで挿入(いれ)られた男をまた一段と締め付けてしまい、内壁がどこか悩ましげな、切ないような感覚を拾い上げはじめる。

男は少年の締め付けに感じ入ったような溜息(ためいき)を漏らした。

「あ〜、やっぱ貸し出し性玩具(おもちゃ)つき鑑賞会は最高だなぁ」

つまりは、そういうことだった。

この上映会の目玉は映画そのものではなく、上映時間中少年を性玩具(おもちゃ)として好きにしていいということだった。

「どれ、今日の孔の具合はどんなもんかな」

「ん…っ♡♡、ぁあ…っ、あ♡♡♡！」

腰骨のあたりを掴まれて、持ち上げられる。
奥まで埋(うず)まっていた男が内壁を擦りながら出ていく感覚に、ぞわぞわとした疼きが広がる。

劇場内に人影はまばらで、たくさんある座席の、思い思いの場所に彼らは座っている。先程から声を漏らす少年を振り返る者はいない。高い金を払っていながら、彼らは少年を時間目一杯相手にしようとはしない。そんなところにも、凡人が想像もできないような金持ちの余裕を感じた。彼らは映画を楽しみ、気が向けば少年が視界に入る席に移動したり、近づいてきて気まぐれに触れてきたりする。

「ぁあ……ッッ！！♡♡」

持ち上げられた腰を、男の股間めがけて勢いよく引き下ろされた。
半分抜け出ていた剛直に再びなかを擦りあげられ、奥に硬い亀頭をぶち当てられる。少年の隘路に男のものはあまりに大きい。喉の奥まで貫かれたような衝撃が走る。

「君の孔はいつ味わっても最高だよ……。私も館主には感謝しないとね」

館主の男は少年の養父で、劇場裏にある居住空間で寝食を共にしている。

でっぷりと太った中年男で、暑がりのためか屋内では夏でも冬でも下着同然の薄着を着て過ごしていた。

身寄りのなかった少年を引き取っただけあり、男の暮らしはかなり高い水準で安定していた。少年は学費の高い学校に通わせてもらい、ねだらなくとも家には流行りの菓子や雑誌、子供向け玩具が常に溢れている。さすがは人気映画館の館主といったところだろうか。

しかし――。

そんな生活の見返りにこんな役目を担うことになるなんて、一体誰が想像しただろうか。

「！？あっ♡♡」

不意に脚の間のものを掴まれる。背後の男の手ではなかった。

闇の中、ふわりと深みのあるハーブ系の香水が鼻をつく。

いつの間にか右隣の席に座っていた男が、骨ばった手で少年のそこを握り込んでいた。硬くなりはじめていた場所をやんわりと長い指で包まれ、人肌の温度に包まれたそこにますます血が集まってくる。

「ふふ……っ。ちょっと触っただけなのに、こんなに……」

こんなに、と言われつつ先端から溢れだす液を絡めとられる。

「ひぃ…っ！ぁ…♡♡」

驚きと妙な疼きに腰をせり出してしまう。すると男の指に竿の先端を押し付けてしまい、まるでもっと触ってほしいと媚びるような体勢になってしまった。

「ほら、ほら……こんなに溢れてくるよ…？」

「……っあ…♡っ、ぃやぁ…っ♡♡、」

耳元に二人の男の息を受けながら、涙目になって耐える。
片側から高級煙草の香り、もう片方から香水の香り。

やっぱりこんな場所、今すぐ逃げ出さなければいけない――。

そう思うのに、いざ男たちに躰を触られはじめると、いつも抵抗の意思を挫かれてしまう。躰の奥から滲み出すような奇妙な疼きが、少年をこの場に留めて離さない。

男たちに好きなように嬲(なぶ)られつつ、自分をこんな商売に使っている養父のことすら憎いと思えなくなってくる。
ひょっとしてこんな自分は意思が弱いのだろうか。が、そんなはずはない。少年は元来快活なほうで、ものをはっきり言う質(たち)だ。
なのに――。

「いつもオジサン思うけど、あんまり君嫌がってないよね？」

「気持ちいいのが好きなんだろう？」

「……！っち、違う…っ、」

悩みの種を指摘され、少年はあからさまに狼狽(うろた)えてしまった。

「へえ～、違うのかい？本当かなぁ……」

「じゃぁ、なんで今日またここに来たんだい……？」

両側の耳に熱い息がかかる。自分の息と混ざり合って、暗闇の中自分の輪郭があいまいになるような錯覚を覚えた。

「それ…、は……、パパに……、連れてこられた…から…、」

蜜の溢れる幼茎をゆるゆると扱(しご)かれ、後ろには男のものを咥え込まされたままで——。

少年は熱に浮かされながら、かすれる声で返答した。

「ふぅ〜ん、なるほどねぇ。お世話になってるパパには、逆らえないわけだ？」

「いい子なんだねぇ。じゃあ、別にこういうの好きなわけでもないけど、——要(よう)はパパに参加させられてるんだ？」

少年は深く首を縦に振る。

男の言う通り、養父しか頼る大人のいない身の上がこの状況を招いてるにすぎない。自分のようなごく普通の少年が、好(す)き好(この)んでこんな場所に来るわけがなかった。

「そっか〜。じゃ、今日はしっかり確かめなきゃねぇ、本当にそうなのかどうか」

急に低められた男の声に、少年の背がぞくりとわなないた。